様式１

令和６年度　自己評価書

秋田公立美術大学附属高等学院

１　本年度の学校評価をふりかえって

今年度も地域協働活動（ビダイフデザインラボ）を中心とした教育活動により、生徒の成長する機会を設定することができた。様々な人・もの・ことと関わる中で、社会性を身に付け、課題意識をもち、主体的に解決しようとする意識が醸成された。アンケート結果によれば、生徒・保護者とも学校生活に対する満足度は高く、専門性の向上を通じて豊かな人間性を育成するという学校経営に対して概ね理解を得られたのではないかと考える。来年度も「人間性を高める」というゴールを共通理解した上で、ぶれない教育活動を展開したい。

また、積極的な広報活動が奏功し、本学院の認知を高めるとともにその特色や魅力を広く周知できた。生徒作品展「明日のクリエーターたち」は５日間の会期で入場者数は1,000人を超え、令和７年度入学者選抜における志願者数は前年度までを大幅に上回った。美術が好きな仲間が集い、切磋琢磨しながら共に高め合っていく魅力的な場所であるという認識を広めるべく、今後も効果的な発信を心掛けたい。

２　評価結果の概要

分野	評価項目	取組状況と成果・課題	評価	改善策
教育課程・学習指導	自己有用感を育む教育活動の工夫	・ほとんどの生徒が、本学院における活動を通して自らの成長を実感しており、自己有用感の向上を図ることができた。社会性を身に付け、人間性を高めることの重要性も感じている。 ・授業においては、ねらいを明確にして見通しをもった学習活動の展開した。専門的な技術や技能が身に付いたと感じている生徒は多い。一方で、実習教科に比べて普通教科への苦手意識が高いことが課題として挙げられる。	B	・各種行事及び各科目の授業において、生徒がそれぞれのねらいを設定し目的意識を明確にして臨めるようにする。その上で、振り返りへ他者から価値付けすることで、自己有用感の向上を図る。 ・基礎・基本の定着のため、振り返りを活用しながら指導と評価の一体化を図り、自らの学習を調整することができるよう支援する。
生徒指導	いじめ防止の取組の充実	・教員間の情報共有により、組織的に対応しながら個に寄り添うことができた。また時機を捉えた集会等の事前指導がトラブルの未然防止に結び付くなど、課題予防的生徒指導を機能させることができた。 ・いじめの認知はなかったが、人間関係づくりでつまずいたり、誤解から仲違いをしたりする事例もあった。集団との関わりを苦手とし、自分から相談できない生徒もいるため、人間関係に配慮する必要がある。	B	・発達支持的生徒指導のもと、自己指導能力を高めて自律的な集団としての成長を促す。 ・疎外感やからかい等の小さな芽を見逃さず、共感的理解、望ましい行動への注視、信頼関係の構築(傾聴と質問を土台とした会話)、肯定的(プラス)ストローク、ＩＣＴの効果的利用を通して、相談しやすい環境づくりに努める。
進路指導	主体的な進路選択を目指す計画的・組織的な進路導	・職業理解ガイダンスや就職支援講座、秋田公立美術大学連携授業など、キャリアプランニングを目的とした進路関係のセミナーや講座、講話等を計画的に実施した。将来の生き方に対する意識は、高まっている。 ・ＩＣＴの活用により、個々の目標や現状を職員で共有したり、迅速に必要な情報を生徒に提供することができた。保護者にもその情報を届けることが課題である。	A	・生徒、保護者に公開している進路関係情報を掲載したＨＰについて、更新のタイミングをメールで知らせるなどといった工夫により、保護者の関心を高めるようにする。 ・一部の進路関係行事をＰＴＡ行事にしてきたが、それを拡大することによって学校の指導に対する保護者の理解度を高め、より組織的な進路指導を図るようにする。
家庭・地域との連携	社会性を育む地域協働活動（ビダイフデザインラボ）の推進	・多くの活動に美術やデザインの力を活かし、専門性の実践の場として貴重な機会を得た。社会貢献を軸とした活動を通して、自主性や自己有用感を高めることができ、キャリア形成への意識も高まっている。 ・地域社会における本学院の認知と存在価値を高めることができたが、過度な負担にならないように、活動時期や募集・分担の方法などに配慮する必要がある。	A	・「生徒の成長に資する活動」という点を抑え、活動を通して育成可能な資質・能力を意識しながら依頼内容を精査し計画する。 ・放課後や休日だけでなく、実習教科とタイアップしたり外部の協力を得たりして、活動場面や指導形態を調整し負担を低減する。またＩＣＴを活用して、生徒との連絡調整を効率的に行う。